アットマーク

新嶋樹

同じはずの朝が暗くなり
時間に閉じこめられてしまった

ワイパーで雪を払う
もうそんな季節になった

だがこの冬はまだ浅い冬だ

明日から昨日へとうろつき回りながら
自分に宛てた手紙に返事を続けるうちに

車の窓が凍りつき
ボウルの湯をかかえて走り回る
ほんとうの冬が来る

分かったからもう少しだけ
時間の中に突っ立っている

　@

　スタバの窓から覗き見る駅舎の入口
　行ったり来たりする老人の
　瓶底眼鏡に映りこむバス
　かれはどこに行きたがってるんだろう

　制服の姿はもうない
　白い息を吐いていたあの子もあの子も
　今頃は鉛筆を動かしているんだろう

　さめた珈琲を飲んでいる自分
　一日が平常運行しているのを知る

@

午前から午後の変わり目
また指を剥いていることに気づく
足元に溜まった白い剥きあと
これらすべて自分だと思う

捨ててきたものを寄せ集めたら
何かできるかもしれない

診察室の窓の外に風はなく
松のてっぺんにはひ弱な枝
前屈みに歩くタクシーの運転手

今日も指を剥いていた

@

鮮やかなサインが欲しい
誰も分からず気に止めないが
わたくしには瞬間それと知れるもの

終わりのある回路が欲しい
熱を帯びて止めようもなく
から回っているのはかなしい

洗い立ての猫のしっぽが欲しい
ふれようとする手を止めて
ずっと見惚れているだろう

あと少し自由になれ

@

夜になり
雨の音を聴いている

ある人はこれを
騒がしいイナゴの群と思い
ある人はこれを
爆弾が落ちると思う
またある人はこれを
かき消された詩人の声にするだろう

映画の前編だけを
撮り続けるような日が
どうやら今日も
ひと段落するらしい

読書灯をひねり
雨の音を聴いている

○

一つの完璧なたまごが
二つに割れたら
片方は死んで片方は生きる

また二つに割れたら
死んだ方の片方は生きて片方は死ぬ
生きた方の片方は死んで片方は生きる

死んで生きて死んで生きたり
生きて死んで生きて死んだり

陽炎の立つ道を
歩いていく人たち

消えてまた現れて

@

さみしさよ
あんたのことが大好きで
魂の伴侶みたいに思ってますが

あんたの脚をぶったぎり
火にかけ
じっくり炙りながら
しみ出すダシでニコニコと飯を食う

そういう気でいることを
あんた分かっているんでしょう
だからあんた
そんなにさみしそうな顔
しているんでしょうね

@

水が蛇口の先を
突き破って落ちる

重い闇に満たされた台所の
磨りガラスの扉の奥に

いなくなった家族たちが
笑い声を立てている

欲望は
何色だろうか

みしみしと鳴る床の上に

花を落として足を投げ出す

@

冬の一日前の夜中に
二基の点滅信号機

その光にあぶり出された
よるべない影に
首根っこをつかまれる

――影の足音を聞けるだろうか？

お前はそんなもんだと言う
肩のうしろを見てみろと言う

部屋に辿り着くまでに
何度も撫でさすって確かめたが
そこには硬い骨しかなかった

@

立方体の水槽に
おちつかぬ沙魚が一尾

壁に唇をぶっつけ
砂をかき立て
かれの立方体を
泳ぎ回っている

夜に水を替えられ
魚は全身を真黒にかえた
濁り水に肌を合わせた沙魚の
開かれた目　アレルギーの呻き

水はかれを
静かに見ている

外では冬の風が
何かに当たっている

@

きれいな女の子が
鼻くそをほじり
それを口に運んでいる

バックミラー越しに
後ろの"Ｉ"の瞬間を目撃する

前の"Ｉ"の眼の光に
釘打たれていながら
（知っているか、知らないか）
女の子は窓の外に
次の鼻くそを投げる

まるで羽根が
生えたみたいに人間だ

前のランプが消える
もう誰もいない

@

生き物たちが夏を
少しずつ盗んで
消えていったから

隙間を見つけて
音を立てるのは
風ばかり

あの夏のにおいを
うまく想像することすら
できなくなっている自分は

前屈みで歩きながら
一年前のコートのポケットに
飴の包みを見つける

ずいぶん待ったね